

第60回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム3

発達障害：これからの対応

発達障害 最近の考え方と対応

平 岩 幹 男 (日本小児保健協会 /Rabbit Developmental Research)

I. はじめに

発達障害とは発達障害者支援法にもあるように、自閉症や注意欠陥・多動性障害 (ADHD)、学習障害などを含む一群の障害として定義づけられている (表1) が、質的には「発達の過程で明らかになる行動やコミュニケーションの問題を主とする障害で、根本的な治療法は現時点ではないものの、適切な対応により社会生活上の困難は減少する」障害であると考えている。現在では子どもから成人までわが国でも100万人以上が該当すると考えられており、決してまれな障害ではない。行動やコミュニケーションの問題を抱えるということは、生まれた時に、あるいは何らかの血液検査や画像所見で明らかになるわけではなく、成長していく中で明らかになり、診断されるようになる。

II. 発達障害における生活上の課題と対応

行動やコミュニケーションの問題を抱えていれば、そうした問題点に対しては、叱られたり、注意されたりすることが多くなり、ほめられることが少なくなる。そうなれば徐々に自分に自信がなくなり、セルフ・エスティーム (self-esteem) が低下する (表2)。子どもから大人まで、ある程度のコミュニケーション能力

表1 発達障害の種類

・自閉症スペクトラム障害	：男性に3~4倍
→カナー型の言葉の遅れのタイプ	
→高機能自閉症 (アスペルガー症候群)	
→レット症候群など特殊なタイプ	
・ADHD (注意欠陥・多動性障害)	：男性に4~8倍
→反抗挑戦性障害への移行も	
・学習障害	：やや男性に多い

表2 発達障害の抱える問題

行動やコミュニケーションの問題を抱えるので
→注意されたり叱られたりしやすい
→めったにほめられない
→そして二次障害につながる
Self-esteem (自己肯定感, 自尊感情) の低下
→ほめること
→ Social skills training (社会生活訓練) が重要
薬物療法だけではなかなかうまくいかない

がある発達障害を抱えている場合には、セルフ・エスティームが低下することによって生活の質も低下することが多いので、低下を防ぐ対応が必要であり、支えるための目標設定を考えるべきである。幼児期の言葉の話せないカナー型の自閉症の場合には、まず言葉を獲得するように療育し、社会参加ができるようにしていくことが目標になるが、療育の過程においてもセルフ・エスティームを保つことは重要である。

セルフ・エスティームを高くするためには、人間として認められ、評価されることが欠かせない。また自分で望ましい行動を選択して、ほめられる経験を積むことも重要である。社会生活訓練 (ソーシャルスキルトレーニング, 以下, SST) はアメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校のロバート・リーバーマン教授によって最初は統合失調症を抱えた方の社会復帰訓練の技法として始められ、その後、学校教育を含むさまざまな分野に応用されるようになり、最近では発達障害にも応用されるようになってきた。発達障害を抱えている場合にはどのように SST を使ってできることを増やすかが「教えて伸ばす」ことにつながる。筆者は SST においても、うまくできたらほめる、望ましくない行動は無視する、できることをスモールス

テップで行うなど応用行動分析の手法を主に用いている。なお SST は言語を使った指示によって行うことが多いので、言語的なコミュニケーション能力がある程度使えるレベルになっていることも必要とされてきたが、実際には言葉を使うことのできない乳幼児においても応用は可能である。

ほめるということ、ほめられたことがわかるという状況を作り出すことが発達障害を抱えた場合の対応には欠かせない。「ほめる」ことから始まり、「ほめられた」ことが子どもにわかる。それは感情が伝わるということも意味している。ほめられたことがわかりにくいコミュニケーションレベルの場合には、最初のごほうびをあげて行動を強化することもある。しかしごほうびとして、例として食べ物などをあげればいいと考え、それだけに頼って言葉や表情での「ほめる」を手抜きしていると、いつまでたってもほめることの有効性は確立しない。ほめることだけ、失敗させないことだけを考えていると、行動のバランスの悪い子どもになるのではないかと、何でも思い通りになると考えてしまう子どもになるのではないかと、打たれ弱い子どもになるのではないかなどの質問を保護者から受けることがある。できることが増えて自信を持つようになることが大切なのであって、そのような対応をしたからごほうび依存になることは通常はない。また、もしそうした問題が起きてきたとしても、SST で対応可能である。

療育的な対応でも日常生活でも、「指示する」→「実行する」→「ほめる」というサイクルを確立することが大切である。このサイクルを確立するためには、まず指示がわかりやすく、単純な内容であることが必要であり、出した指示が実行できないという状況を避ける必要がある。指示がわかりやすいということは視覚的に見せることも含まれるし、できないことは手伝ってでもできるようにするという事も含まれる。このサイクルを1日に何回できるのか、50回か100回か、サイクルを意識しながら、ほめてできることを増やし、問題になる行動を減らす、これこそが発達障害を抱えた子どもたちへの療育においても日常的な対応においても重要であり、それがセルフ・エスティームを上昇させることにもつながり、また SST の実施における目標でもある。

Ⅲ. 発達障害における将来目標

子どもから大人まで発達障害を抱えている場合にも

表3 自立するための目標

すべての障害に言えることだが
大きな目標の一つは…可能であれば

税金で養われる人ではなく
税金を払う人になろう

それが本当の意味での自立
そのためには何をするのか
子どもの時期は決して長くはない

将来目標の第1は「自立すること」である。もちろんこれは発達障害に限らず、身体障害においても知的障害においても精神障害においても基本的には同じである(表3)。しかし発達障害では外見上はその障害が明らかではなく、社会生活上もしばしば場面によって困難さを認めたりそうでなかったりすることもあるので、そして行動やコミュニケーションに問題を抱えやすいということは、先にも述べたようにセルフ・エスティームが低下しやすいので、自立する目標を明確に持つ必要があると考えている。幼児期にはともかく、思春期以降になれば、どのようにして稼ぎ、生活していくかのイメージをするトレーニングも必要になる。

成人の知的障害者のための通所支援(いわゆるデイ・ケア)をお手伝いしていると、そこには結果として知的障害と判定されて通所している人々がいることに気づかされる。もし子どもに適切な対応と療育を受けていたとしたら、今ここにはいなくて済んだのではないかという疑問も湧いてきた。人生を80年とすれば子どもの時期はわずかに20年しかない。その時期にすべきことをしていなければ、その結果をその先60年にわたって抱えていくことになる。成人期の発達障害を抱えた人たちの会に出席したり、保護者たちの集まりに頼まれて出席したりした時によく聞かされることは表3にも掲げたように「税金を払う人になりたい」という言葉である。それがいわば自立のシンボルでもあるし、子どもたちの発達障害に対しても、子どもの時期から障害に対するセンチメンタリズムに流されず、明確に意識すべきと考えている。

参考図書

- 1) 平岩幹男. みんなに知ってもらいたい発達障害. 診断と治療社, 2007.
- 2) 平岩幹男. 幼稚園・保育園での発達障害の考え方と対応. 少年写真新聞社, 2008.
- 3) 平岩幹男. 自閉症スペクトラム障害: 療育と対応を考える. 岩波新書, 2012.